

一般演題 減圧症・潜水医学 OP4-6

我が国が植民地時代の大韓民国に伝承した送気式潜水漁の歴史と今

○森松嘉孝¹⁾ 望月 徹²⁾ 村田幸雄³⁾ 刈部 徹⁴⁾
村田清臣⁴⁾ 石竹達也¹⁾

- | |
|----------------------------|
| 1) 久留米大学医学部 環境医学講座 |
| 2) 東京慈恵会医科大学 環境保健医学講座 |
| 3) 国際潜水教育科学研究所 |
| 4) NPO アンダーウオータスキルアップアカデミー |

【背景】

船上に設置されたコンプレッサーから送気を受けながら沿岸海産物を採捕する漁法は、約100年前に朝鮮半島へ伝承され、現在も両国で行われている。

【目的】

大韓民国で行われている送気式潜水漁の就労状況と安全管理を調査する。

【方法】

大韓民国で潜水器船の登録が最も多い巨済島を訪問し、潜水士の就労形態と安全管理を調査し、減圧症の発症情報と発症者へヒアリングを行った。

【結果】

大韓民国巨済島では、フーカー潜水を“Diver”，タンク潜水を“Skin scuba”，息止め潜水を“Diving”と呼び、ヘルメット式フーカー潜水漁師はいなくなっていた。また、魚を獲る潜水漁師を“もぐり”と呼び、他にも同じ発音は“カタガネ”，“カップ”，“オサガネ”，“ウンパンセン”といった日本語が定着していた。当初、ヘルメット潜水漁師は減圧障害で死亡するか、他の病気で死亡するかという命がけの仕事であったが、今も当時受傷した減圧障害による後遺症に悩まされている元ヘルメット潜水漁師の存在があった。安全面では、我が国の高気圧環境下における作業者に対する高気圧作業安全衛生規則に相当する規則は存在するも、実際に行われている安全教育は潜水深度が浅い作業潜水士向けの内容であることから、彼らに参考となる教育ではないとの現場の意見であった。また、送気装置を積載した船は船底を自主的に黄色に塗装することで周囲へ潜水器漁を周知し、漁協の建物内に高気圧治療装置が設置することで、高齢の潜水士は症状の有無にかかわらず、繁忙期には潜水前後に高気圧環境下に入るシステムを確立していた。

【まとめ】

我が国が伝承した送気式潜水漁は、当初致命的な減圧症を発症していたが、その後、安全面に独自の改善が加えられた。しかし、当時の無理な潜水による減圧症後遺症には、現在も苦しんでいる潜水士が存在していた。